

《論文》

家族の語りから紐解く アメリカ先住民の社会的アイデンティティ (1)

小笠原はるの・金 誠

1. はじめに

マイノリティの語り（ナラティブ）のなかに何を見出すことができるだろうか。本稿ではアメリカ先住民（ネイティブ・アメリカン）に着目し、その語りのなかに見られる彼らのアイデンティティの所在を確認しようとする。

アメリカ先住民は迫害と略奪の歴史を生きざるをえなかった。この被暴力に満ちた歴史は、現在でも居留地における貧困や犯罪、ドラッグ依存などの社会問題ともつながっている。テイラー・シェリダン監督の映画『ウィンド・リバー』¹は、ネイティブ・アメリカンの居留地で起こったある少女の死の謎を追うサスペンス映画だが、作品で描かれるアメリカ先住民の居留地で生きる姿は、彼らの現在がいかなるものであるのかを突きつけるものでもある。

映画のなかで殺害された少女はネイティブ・アメリカンであり、その父は作中のラストシーンで娘を思い、その死を悼もうとする。しかし、先住民の伝統的な文化を受け継ぐことのなかった彼は、先住民として娘の死を悼むための姿に扮することができない。家族と自身のアイデンティティの拠り所となる先住民文化を失ったネイティブ・アメリカンの姿を印象づけるシーンである。

このことは彼らもたらしたものではなく、外からの暴力によってもたらされた結果として理解すべきであろう。すなわちアメリカ先住民は土地や生命だけでなく、アイデンティティの拠り所となる文化をも略奪されたのである。これはかつての同化教育政策に見られる問題である。

19世紀後半、ネイティブ・アメリカンの居住地が中・西部へと追い込まれていくなか、リチャード・ヘンリー・プラットは1879年9月、ペンシルベニアのカーライルに寄宿学校（カーライル・インディアン学校）を設立している。この学校設立の目的は「インディアンを国民生活に結びつけ、英語を教え、初等教育と一般的な知識を与え、実用的な産業と自活の手段を提供することにより、インディアンを国民生活に導くこと」²とあるように、カーライル・インディアン学校はアメリカ国家への同化を促すための学校であり、ネイティブ・アメリカンからアメリカ先住民文化を消し去り、アメリカ国家に抗しない従順な国民になることを義務づけたのであった。その後、次々とインディアンの子弟たちを収容する寄宿学校が設立され、カーライル・インディアン学校の成功と同様の成果が期待された³。それらの学校では多くのネイティブ・アメリカンの子弟らが共通の言葉（英語）、近代的な服装、労働に勤しむための技術、近代的な体操場やグラウンドでの身体教育、スポーツ、そしてキリスト教の教えなどを経験・実践し、アメリカ社会に溶け込む思考と振る舞いの様式を学んでいったのである。



写真1. パレードするカーライル・インディアン学校の生徒たち [1887]
 (“A Very Correct Idea of Our School” より)

こうしてインディアン学校に通うネイティブ・アメリカンはアメリカ社会における先住民というマイノリティの属性を生きつつ、近代性を身に纏うことになった。先住民の文化的アイデンティティとは切り離されながら、新たなアイデンティティを模索すると同時に主体的にアメリカ社会を生きることもなったのである。すなわちこうしたインディアン学校はネイティブ・アメリカンのアイデンティティにアンビバレントな状況を生み出したと言える。この時、インディアン学校で実践された野球やフットボール、陸上競技などのスポーツはそうした近代的な価値観を身体に刻み込んでいくうえで有用なツールでもあり、ネイティブ・アメリカンの子どもたちを先住民の伝統的な遊戯から遠ざけることにもなった。またネイティブ・アメリカンの子どもたちのなかにはインディアン学校で身につけたスポーツを通じて自己実現を果たすものも現れることになる⁴。

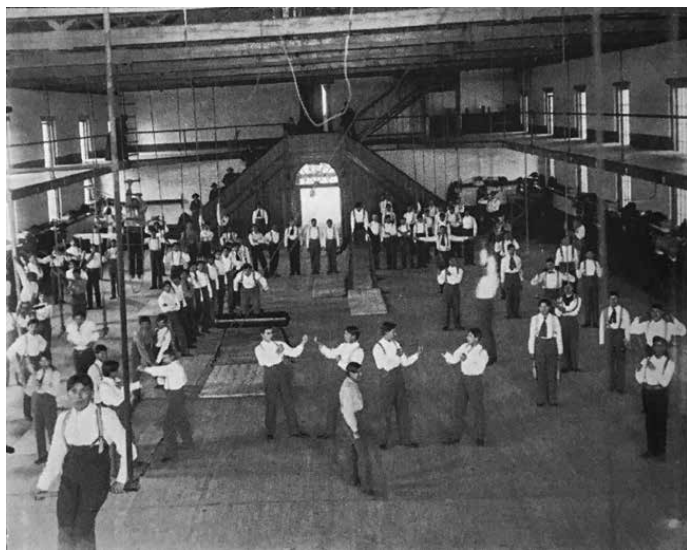


写真2. カーライル・インディアン学校の体操場 [1888]
 (“A Very Correct Idea of Our School” より)



写真3. カーライル・インディアン学校の野球チーム [1891]
 (“A Very Correct Idea of Our School” より)

2. スポーツのなかの先住民表象の問題

ネイティブ・アメリカンにみる家族の語りの重要性はスポーツに現れる先住民表象の問題とも関わる。なぜなら家族の記憶がアメリカ社会をアスリートとして主体的に生きたネイティブ・アメリカンの姿の実際を導くからである。その姿はアメリカにおいて問題となっているスポーツのなかの先住民表象とは乖離しているものである。

かつての西部劇で表象されたインディアンのはきは、スポーツの世界において競技の勝利にかける貪欲さや戦うことのシンボルとされ、アメリカ大リーグのクリーブランド・インディアンスやアトランタ・ブレーブス、NFLのワシントン・レッドスキンスなどのチーム名やマスコット、また多くの大学や高等学校のチーム名などに現れることになった。インディアンのステレオタイプである反動的、攻撃的、獯猛、野蛮、野生的な先住民像とスポーツが短絡的に結び付けられたのである。

例えば、メジャーリーグのクリーブランド・インディアンズはチーム名そのものが人種的カテゴリーの押し付けであると論争的になっている。とりわけ1947年から同球団のチームロゴとして使用されてきた「チーフ・ワフー」は、赤い顔に大きな鼻、頭には羽根飾りをつけてニンマリ笑っている姿がインディアンステレオタイプを表象しているとして問題視されてきた。球団側は、1887年から1889年までチームに所属したネイティブ・アメリカン初のメジャーリーガー、ルイス・ソカレキスの功績を讃える意味からチームロゴとして使用していると述べていたが、2018年1月にインディアンズ側が先住民団体の「ロゴは侮蔑的」だという抗議に応じて、「チーフ・ワフー」のロゴをユニフォームや帽子から外すことを決定することになった⁵。

インディアンズに限らず、ネイティブ・アメリカンのステレオタイプをチームの売り物にしている事例は多々ある。ただこれら表象化されたチーム名やマスコットはマスコットそのもののイメージが先行し、客体化された先住民としての他者は生身のコミュニケーションが不可能ななかで、そのイメージのなかに繋ぎ止められ、繋がれたままのネイティブ・アメリカン像が拡散されることになっている。こうしたネイティブ・アメリカンの表象を作り上げる暴力性は植民地主義の延長でしかないのである。スポーツに先住民表象を結びつけることで、多くの人々がそのイメージをそのまま無防備に受信・消費し、ネイティブ・アメリカン自身の持つアイデンティティからはかけ離れてしまったところでネイティブ・アメリカンが他者によって生かされている。

つまりネイティブ・アメリカンの語りに着目する意義は、イメージとしても奪われた先住民像を取り戻し、マイノリティとしての社会的アイデンティティの所在を見出す作業になるということである。先住民に付与された社会的イメージは、その実際を語るものによって反証される。さらに家族を想起したその語りは、忘却されていた記憶を呼び覚ますことでマイノリティを生きる自己を再構築することにもなるのである。

3. アリセ・アリ・クリスティによる家族の語り

真実とは、それを見る者にとっての真実でしかない。わたしたちが第三者として、あるひとつの世界を客観的に眺める時と、その世界に属しその中で物事を見る時とでは、世界の真実は異なった姿を取るに違いない⁶。

ネイティブ・アメリカンの世界を、その〈外側〉と〈内側〉を行き来するという立ち位置から描いているのが、アリセ・アリ・クリスティ著の論文「ネイティブ・アメリカンの大学スポーツ選手による高等教育へのアクセス方法」である⁷。アリセ・アリ・クリスティは、ネイティブ・アメリカンの家族に囲まれて育ち、スポーツ界だけでなくコミュニティのヒーローであった祖父や家族をとりまく世界を〈内側〉から眺めていた。自分の知らない多くの人たちからも祖父の物語を聴き、祖父の生き様に触れ、のちに自身もスポーツ推薦で大学に進学し、ネイティブ・アメリカン研究を志す。彼女は〈外〉の世界からも自らが置かれた世界を対象として眺めていたのである。

本章では、アリセ・アリ・クリスティによる論文で多くのページを占めている「家族の語り」を取り上げ、彼女が「語る」ことによって、祖父、家族、コミュニティと自らの関係をどのように見出していったのかを探る。彼女のナラティブでは、自己や他者の世界がどのように語られ、世代や地域を超えていこうとしていたのだろうか。これまで他者によって表象されてきたネイティブ・アメリカンが、自らを表象する側に回ったことの意味をも考えながら、彼女の物語に提示される複雑なアイデンティティの様相をみていきたい。

祖父アリを代表してここでお話をさせていただくことを大変光栄に思います。祖父は早世だったため、残念ながら私たちは直接祖父を知っているわけではありません。しかし、祖父にまつわる話を聞きながら育った私たちは、祖父の精神と哲学を受け継いできています。これま

で「あなたのお祖父さんがわたしに初めてのグローブをくれたのですよ」とか「アリさんは私が人生で最も影響を受けた人です」といった話をどれほど聞いてきたことでしょうか。祖父の孫である私たち4人は幸運にも祖父の名前を冠したアルバート・アリ体育館でバスケットボールをする機会に恵まれ、試合や競技に対する祖父の謙虚さと前向きなスピリットに触れることができました。何より、人生に対する情熱を持ち、家族を大切にされた祖父の姿勢は、祖父の娘2人にも受け継がれていることを感じています。私たち孫4人も両親と同じように祖父の影響を受け、青少年と接しながら、体を動かすことと教育を受けることがどんなに大切なのかという祖父の教えを次世代に伝えていきます。コートの内外で教えることに情熱を持ち、若い人たちの模範となることを祖父から学んできています。みなさんの心に祖父アリの物語が生き続け、祖父の物語をわかち合っていたいただいたことに感謝いたします。アルバート・アリのライフストーリーは今後も語り継がれ、後世に伝えられていくことでしょうか。

1968年5月31日、アルバート・アリは病院のベッドで瀕死の状態で横たわっていました。病により失明し、まもなく別世界に旅立つことは避けられませんでした。そのとき体育館は、祖父を一人の人間として、夫として、父親として、選手として、教師として、友人として称えるために集まった人たちで埋め尽くされていました。スピーカーからは慈愛に満ち、競技に対して献身的で、コートの内外でスポーツマンシップを発揮していた祖父、コーチ、教育者、友人として、優しく、柔らかな物腰であった祖父のすべてが称えられていました。祖父は電話を通して彼らの声を耳にし、体育館が祖父に捧げられたことを知りました。その死から44年を経て、2012年3月31日、祖父は北カリフォルニアのスポーツの功労者として殿堂入りをしました。冒頭の引用文は祖父の殿堂入りを祝したときの記念スピーチで、私と兄弟3人で書いたものです。

祝賀式が行われた二晩のあいだ祖父の名誉として称えられたのは、

謙虚な姿勢、優しさ、家族や友人に対する無償の愛、そして苦難や難題があっても前向きに臨み、成果をあげようとする能力でした。アメリカンフットボールの競技場では巧みに動き回り、野球場では華々しく、バスケットボールのコートでは目まぐるしく立ち回り、陸上競技ではトップスピードで、祖父はアスリートとしてずば抜けた活躍を披露しました。わずか167センチ、68キロと小柄であったにもかかわらず、高校時代には野球チームをリーグ3連覇、バスケットボールチームをリーグ2連覇に導き、30年近く続く2つの得点記録を打ち立てています。大学時代は北カリフォルニアのプレイサーカレッジで3種目のスポーツでスター選手となり（当時は大学で複数のスポーツができた時代）、アメリカンフットボールのランニングバックとして3度シエラ・フットボールリーグに選出され、チームを3連覇に導きました。家族ぐるみの付き合いをしている友人のラネル・リーは、祖父のプレーは言葉にできないほど感動的だったと回想しています。決断力と勝ちたいという強い気持ちを持ち合わせ、祖父はあらゆるスポーツに熱中していて、それが祖父の人生だったと。

大学卒業後、祖父は投手としてシカゴ・ホワイトソックスとプロ契約を結びました。マイナーリーグで5勝をあげた後、突然、重い関節炎を患い、20代後半で引退。30代の前半は車椅子生活を余儀なくされました。病気によってプロ野球選手としてのキャリアを続けることができなくなったとき、祖父は故郷に戻りました。自分を愛し、支えてくれた地域社会に恩返しをし、自分を尊敬する少年たちとキャッチボールをし、そして、子供たちに人生で最も貴重な贈り物はそのときの自分を受け入れ、自分らしく幸せに生きることだと伝えるために。祖父はサクラメント州立大学とチコ州立大学で教員免許を取得し、地元の小学校で長年に渡って指導を行ったり、現在も続く青少年と成人のスポーツリーグを立ち上げたり、地域の人々にとって重要な存在であり続けました。祖父が故郷に戻ってきて教えるようになったことが、どれほど子供たちにとって大きな意味をもったのかと友人リーは

っています。祖父が35歳になったとき、関節炎が再発し、それまでの仕事を中断せざるを得なくなり、短いながらも心に響く余生を病院のベッドで過ごすことになりました。

アルバニア人とメキシコ人の血を引く祖父のアメリカンドリームは、家族やコミュニティを犠牲にした、資本主義的なお金の蓄えや個人主義や自己責任に依拠した経済活動ではありません。祖父が大切にしていたのは、食卓を囲み、娘たちを膝に乗せ、愛する人たちとコーヒーを飲むことでした。39歳で他界した祖父に、私は会うことができませんでしたが、祖父の存在は確固たるもので、私はいつも祖父の物語と笑いに包まれていました。私たち家族にとって祖父は伝説的な存在であり、模範となる人物です。その短い生涯を通して、祖父は生き方を模索し、110%の力で生き、肉親だけでなく、何世代にも渡って続くコミュニティ全体に尽きることをない愛と思いやりを注いだのです。

地元の高校のキャンパスにある「アリ・ストリート」を歩き、祖父の名前を冠した体育館でバスケットボールをしたこと、毎年、高校で最も優れた男女の上級選手に贈られる「アルバート・アリ・スポーツ賞」を受賞したことは、私にとってのかけがえのない贈りもの・経験・思い出となっています。祖父の存在と祖父の人生に対する思いを感じるのです。あるとき60歳の男性が、私がアルバート・アリの孫娘であることを知り、私を抱きしめて泣いたとき、私は祖父に対する畏敬の念を抱きました。私は普段「おじいちゃん」と呼んでいる人を永遠に尊敬できることに喜びを感じます。真のチャンピオンとは挫折してしまうような状況でも冷静でいられる人だといわれていますが、それこそ祖父に当てはまります。祖父の才能と人間性は、郡を越えて遠くまで広がり、彼を知る人たちや彼の話を聞いた人たちの宝物になっています。祖父に、自制心、知識、自信、そして人々に知恵を授けることができる技法をもたらしたのはスポーツと競技活動であることはわかっています。スポーツがいかに大切かということです。

わたしは祝賀スピーチを通じて、アルバート・アリが、そのスポーツの才能とスポーツマンシップを通じて1930年代から1940年にかけてスポーツ界の寵児として認識されるようになったことについて話しました。スポーツが祖父に情熱と才能をわかち合う機会を与え、スポーツを通して彼が愛し、彼を愛してくれた人々にお返しする機会をもたらしました。祖父はスポーツが提供できる最高のものは、単に競技をすることではなく、体を大切に、尊厳を持ちながら人生を送るための指針であるといっています。祖父に会う機会はありませんでしたが、祖父の教えと競技への情熱は私の中に刻みこまれ、健康でバランスの取れた人生を送る上での規範となっています。祖父に体育館が寄贈された晩、彼はこう宣言しました。「野球でも人生そのものの打席でも、ファンの応援があることはとても素晴らしいことです。人生の試合での勝ち目がどうであれ、困難に立ち向かうための、さらなる力となります。」祖父は体育館の寄贈を光栄に思い、北カリフォルニアのスポーツの功労者として殿堂入りしたことに感謝すると思いますが、祖父が最も誇らしく、同時に謙虚な気持ちになれるのは、大切にしているコミュニティからの溢れんばかりの愛に違いありません。

物心ついたときから競技は私の日常生活の一部だったので、私は長い間、自分をアスリートだと考えてきました。卓越した祖父の話を知ったり、兄弟とバスケットボールをしたり、父とは野球、母とはテニスコートで延々とグラウンドストロークを打ち続けたりと、私はスポーツに囲まれながら育ちました。祖母は1940年代にオクラホマ州のチョクトー族の領地から北カリフォルニアに移り住み、第二次世界大戦中と戦後に他の多くのアメリカ先住民と一緒に暮らしていました。ここで祖母は祖父アリと出会いました。カリフォルニアはすぐに祖母の故郷となり、祖父アリは地元のスポーツ界のスターになり、祖母は2人の娘を産み、コミュニティで大切に育てられました。地元で祖父母が築いた強い絆とルーツがあったため、母と叔母はカリフォルニアに残り、子育てをすることを決めました。チョクトー族である家族

の大半もカリフォルニアに移転したためです。学校以外にすることがほとんどなかったため、スポーツが私の人生となりました。父は地元のラケットクラブのテニスのプロで、母は高校の女子テニスチームのコーチをしていたので、私はテニスコートで育ち、幸いなことにテニスが好きでした。自分より年上で上手な男の子と対戦することも多く、自分の能力を最大限に発揮するために、より厳しい努力を強いられる状況でした。テニス、バスケットボール、ソフトボールに打ち込んだことで肉体的にも精神的にも、また学業面でも多くの恩恵を得ることができ、奨学金を得て大学に進学し、テニスを続けることになりました。テニスを通して、自分がどのような人間で、どのように自分自身をみているのかが明らかになり、自分に何ができるのか、努力と決意によって目標を達成することができることを知ることができました。

大学の学位を取得することは、わたしが成長する上で目標としたことです。チョクトー族の文化では、教育は歴史的にみて非常に重要なものでした。“Nan ikhvnanchi, nan ihvnanchi, keyu hokma pi illachi”という言葉がありますが、これは「教育せよ、教育せよ、さもなければ滅びる」という意味です。1815年、チョクトー族は教育のためだけにミシシッピに宣教師を招きました。部族の指導者たちは、青少年の教育にヨーロッパの制度を取り入れることが、私たち民族にとって唯一の希望であると考えていました。公の学校教育の利用が、チョクトー文化の変革に使われてしまうということで、この変革に抵抗する者もいましたが、多くのチョクトー指導者は民族存続のために必要なものとして学校教育を歓迎しました。ダンシング・ラビット・クリークの条約では、彼らは土地の割譲と引き換えに、オクラホマでの学校への資金提供を交渉しました。1938年の「涙の道」の結果として、オクラホマに到着して間もなく、チョクトー族は学校制度を確立しました。オクラホマでは部族の指導者たちは、欧米人の教育が連邦政府や州政府の政策、白人入植者の侵入から自分たちを守ることになること

考え、学校教育を支持したのです。このように、西側の教育の重要性はチョクトー族の人々に強制されたものでありながらも、結果的に、今日のチョクトー族にとって教育が重要である理由にもつながっていることがわかります。

しかし、私が大学進学を目標にしたのは、学位を取得するためだけではなく、大学でテニスをするでもありました。高校生の時、テニスで大学進学を目指すようになったのです。1日4時間テニスをし、朝4時に起きてランニングをして持久力を鍛え、夜遅くまで勉強して平均点4.0を取り、大学から奨学金をもらうチャンスを増やしたのです。また、プレッシャーの中で戦い、人前でパフォーマンスを発揮することが、スカウトされるために重要であることも知っていました。週末はカリフォルニアのトーナメントに出場し、北カリフォルニアのジュニアでトップ10に入ることによって、大学のコーチ陣の目にとまることができました。テニスに費やした時間と献身が身を結んだのです。高校3年のときには北カリフォルニア・サンフォーキン地区で優勝し、カリフォルニア州の4つの大学から奨学金のオファーを受けました。6歳のときに初めてテニスラケットを握ったときから抱いていた夢が叶ったのです。チョクトー族の祖先がいうように「良き道」が私の前に広がりました。

いろいろ考えた末に、最終的にカリフォルニア州立大学のデービス校に進学することにしました。理由はたくさんありますが、ひとつはメンターがつき、指導を受けられる可能性があったことです。リクルート時に参加したツアーで、監督やチームと最も強い絆を感じたのです。また、大学は実家から1時間半の場所にあり、家族との交流がとても大切であったわたしにとって願ってもない距離でした。学問的にも、私が興味を持っていた、ネイティブ・アメリカン専攻がありました。将来チョクトーコミュニティのために働き、恩返しをしたいと思っていたので、この大学は正しい選択でした。

デービス校での4年間、私は全額奨学金で大学のテニス部でプレー

しました。しかし、大学の他のスポーツ選手のように、テニスが私の人生のすべてというわけではありませんでした。ネイティブ・アメリカン学生協会にも深く関わり、学内で開催されるネイティブ・アメリカン・カルチャー・デーや先住民族の伝統的な交歓会であるパウワウの議長も務めました。学生アスリート・アドバイザーにも選出され、全学生アスリートと学長室との連絡役となり、学生アスリートの声が学内に届くように努めました。これらの役職に就くことで、大学に存在するさまざまな集団に意識の目を向けることができるようになり、互いの対話を促進することができ、最終的に私の大学生生活のバランスをとることができました。その結果、2001年に開催された「ネイティブ・アメリカン・カルチャー・デー」のメイン・スピーカーとして、ビリー・ミルズを招聘する機会を得ました。ラコタ族のミルズは、ハスケルインディアン大学のスターランナー（1955-1957年）で、後に1964年の東京オリンピック、1万メートルで金メダルを獲得した人物です。会場にはネイティブ・アメリカン研究の関係者や学生アスリートたちが押し寄せました。

この経験から、アメリカ先住民の学生にとって大学は孤立したものである必要はなく、学生アスリートにとってスポーツだけに没頭する必要もないのだと実感しました。バランスが大切なのです。また、ビリー・ミルズは、ネイティブ・アメリカンのアスリート・モデルが若者や地域社会の変化を促進することの重要性を強調し、現代の大学のアスリートにはネイティブ・アメリカンの代表がないことも明らかになりました。このことが、より多くのネイティブ・アメリカンの人々が大学で好きなスポーツを追求できるようにしたいという私の情熱に火をつけたのです。2003年、私はネイティブ・アメリカン研究の学士号を取得しました。大学でテニスをしたことで、大好きなスポーツに打ち込み、体を動かすことができ、また、ネイティブ・アメリカンの大学コミュニティに触れることができました。大学の学位を取得することで、修士号や博士号を取得し続けることの重要性を知

り、最終的にはネイティブ・アメリカンの若者たちが自身の夢を追うことや変化していくことを支援できるようになりたいと思っています。現在、私はアリゾナ大学でネイティブ・アメリカン研究の博士課程を修了しようとしています。学位論文のテーマは、ネイティブ・アメリカンの大学選手にスポーツが与える影響についてです。彼らが大学で競技を追求することになった要因やそれらが阻害された理由について詳細に調査をし、スポーツがネイティブ・アメリカンの教育上の願望にどのように役立ち、あるいは役立たなかったかを示す予定です。

私の個人的な経験から、個人またはチームスポーツは、ネイティブ・アメリカンの学生にとって、大学進学への道になりうると信じています。ネイティブ・アメリカンのアスリートが奨学金の支援を受けて、経済的負担が軽減され、教育の機会を得ることは可能ではないかと考えます。問題は、大学では好きなスポーツに打ち込みながら学位を取得する学生アスリートが何千人もいるのに、なぜネイティブ・アメリカンの選手が大学スポーツ界にほとんど存在しないのかということです。わたしは、これからの研究でその理由を探ろうと思っています。

4. 家族の語りと社会的アイデンティティ

ネイティブ・アメリカンが自分たちの物語を自分たちで紡ぐのは20世紀も後半になってからである。彼らの世界観では元来、自我は中心的存在に位置せず、自然の調和的、循環的の中でホリスティックな世界観を有していた。そこには西洋的な主体概念は存在しなかったといわれている。ところが、植民地化されたことにより、彼らは、アイデンティティの構築性を最も痛感する民族になることを余儀なくされる。アイデンティティ探究が自らの存続のために必須となり、〈ネイティブ・アメリカンの意識〉が芽生えることとなる。しかし、ここで問いが生まれる。ネイティブ・アメリカンが自

分たちのアイデンティティを模索し、自分たちの物語を語り始めたといっても、つまるところ、植民地化や同化政策の結果として言語やスポーツなどの高等教育を受けるチャンスを獲得した結果ではないか、つまり、自分たちを搾取し、迫害した者たちの文化に取り込まれたということではないか。このような問いかけも存在する⁸。

アリセ・アリ・クリスティによる家族の語りにも、搾取されたり、利用されたりするものが抱えている「矛盾」が描かれている。歴史的にみて西側の教育やスポーツは学校制度によって押し付けられ、その教育を受けること、スポーツにたずさわることをネイティブ・アメリカンの部族や家族がなによりも大切にしていることは彼女のナラティブからも明らかである。ネイティブ・アメリカンというマージナルな視点を持ちながら、高等教育で特権的な権威によって管理されている教育やスポーツに関わりを持つ。そこで語られる「教育」や「スポーツ」は「両義的」であり、アリセ・アリ・クリスティは常にその両義性を振り返りつつ、その狭間を自己反復しているようにみえる。

「コミュニティ」や「地域」も語りのキーワードとして頻繁に登場する。今でもはっきりと存在する助け合いの感覚。自分たちの存在が過去とは切り離せないものであるという明確な認識。コミュニティでは価値観の共有が大きな意味を持っており、最も尊敬を集めるのは、物質的な富を築いた人でも、個人的に素晴らしい業績を残した人でもなく、他の人々を助ける人、そして自己がさまざまな相互関係の中でホリスティックに存在しているのだということを理解している人(=祖父や先達者)であるということ。家族のみならず、青少年や将来を担う子供たちへのつながりと共生の感覚。これらすべてがアリセ・アリ・クリスティの物語に通奏低音として響いていおり、それらは決して「外」から与えられたり、借りてきたりしたものではなく、「<わたしたち>の物語」を土台から支えている。さらに、物語はネイティブ・アメリカンの共同体だけでなく、ネイティブ・アメリカンと非ネイティブ・アメリカンの両方の生に焦点をあてた「地域」についての語りとも受け取られる。高校、大学、社会で、人々がそれぞれの民族的・歴史的・社会的

背景を背負いつつ、どのように生きていくか、そこに考えを至らせること。それがアリセ・アリ・クリスティのいう「バランス」ともいえよう。

スポーツや教育の経験の物語を通して、アリセ・アリ・クリスティは先住民性を伝えようとし、それは必ずしも支配層や主流層に対する文化的屈服ではなく、逆にネイティブ・アメリカン性の獲得を容易にし、また、彼女が大学で行った活動のように、他民族や他集団という広範なマイノリティとのつながりを可能にするものとなった。誰しものが何かのかたちで「マイノリティ」の立場を経験する。それゆえ、この物語は普遍的な体験として共有されるのではないだろうか。

また、家族やコミュニティの物語を語り、それを研究対象にするということは、自らや家族が置かれた歴史的コンテキストや集団の記憶を再構築し、そのコンテキストに具現化された文化的知をあぶり出そうとする試みであるといえる。コンテキストの再構成こそが、自らの社会的アイデンティティの重要な出発点となりうることを示している⁹。

多文化社会をうたう今日のアメリカでは、先住民や少数民族が同化すべきだという考え方が見直され、現代社会は独自性を保つ多数の民族の統合としてみなされるようになってきている。しかし、社会の「異質」な集団は、依然、社会の「主流」と対立して存在しており、ネイティブ・アメリカンが住む土地も、中央部に対して辺地、中心部に対して貧困地区にあることもあり、異質的なものとみなされがちである。つまり、ネイティブ・アメリカンの多くは、社会的・経済的に遠く隔絶された位置に置かれていることが多い。彼らは社会的・経済的不平等と不利益を被り、社会の底辺層に固定されたまま、厳しい生活を送ることを余儀なくされ、そこから抜け出すための1つの手段が、物語でも語られていた「スポーツ」と「教育」であった。アリセ・アリ・クリスティは、自らの主流文化的側面と周縁性の混淆状態を自覚し、かつ主体的に利用し、周縁部におかれた文化的アイデンティティにより重きを置いて物語を紡ぎ出したのだ。

「ハイブリッドの場所から」と題したインタビューを受ける中で、ポストコロニアル批評とジェンダー批評の視点から文化における他者表象を研究す

るトリン・ミンハは次のように語る。

アイデンティティは、闘争の帰着点ではなく、むしろ出発点です。個人的なものを政治の次元に移すために、アイデンティティの概念が必要なことは認めますが、これに縛りつけられようとは決して思いません。……この複雑なポストコロニアリティの現実のなかで大切なことは、自分自身と根源的な『不純さ』を引き受け、ハイブリッドの場所から語り、つまり同時に二つか三つ以上の事柄を語ることの必要性を認識することなのです¹⁰。

アリセ・アリ・クリスティがこの時代にネイティブ・アメリカンとして生きること、それも数少ないアスリート経験者で研究者として生き、語ることは、他者によるステレオタイプな表象に屈することなく、また支配による枠組みに取り込まれるのでもなく、自己の中に時代や文化を超えて行き来する〈ネイティブ・アメリカンなもの〉を呼びこむことだった。彼女の居場所は、個の語りによって生み出されるので、あくまでも個人に立脚したものであるが、社会的に輪郭づけられたアイデンティティは瓦解してしまう場ともなる。現実世界をよりよくしていく契機となりえるのは、社会の中心を仮定して、そこからの一元的な距離として自らを位置づけるのではなく、中心と周縁、多数と少数、過去と現在と未来といった区分を跨いでいけるような、そんな自己が存在できる物語を語ることなのである。

5. おわりに

本論文では、広く流布している固定概念的な「インディアン」表象への問題提起を行い、教育やスポーツを通して、外から与えられたネイティブ・アメリカンのイメージの作為性を暴くとともに、植民地支配がネイティブ・アメリカンに与えてきた影響を指摘した。さらに、主流社会によるネイティブ・アメリカンの沈黙化と表象、ネイティブ・アメリカンの沈黙による抵

抗、その状況から、一人のネイティブ・アメリカンの新しい声がどのように生み出されるのか、その過程をアリセ・アリ・クリスティによる家族の物語を通して考察した。彼女の人生に影響を与えているものは何であり、彼女は自分や家族の人生をどのように語るのか。スポーツが彼女のアイデンティティとどのように交差し、その結果として、社会的世界における役割をどのように経験し、創造し、意味づけているのか。これらは私たちの存在の本質、アイデンティティ、目的と意味すべてに関わる問いでもある。

現在、先住民族の研究は広がり、さまざまな展開を示してきてはいるが、スポーツとアイデンティティをテーマにした国内の研究は限られており、多くは断片的なものにとどまっている。海外の先行研究の調査もこれからである。一般社会においても、固定的な先住民のイメージは根強く、アメリカのネイティブ・アメリカンの問題についても多くは知られていない。本研究が〈ネイティブ・アメリカンと社会的アイデンティティ〉・〈ネイティブ・アメリカンとスポーツ〉の関係性をめぐる本格的な研究への布石となれば幸いである。

注

- 1 2017年にアメリカ合衆国で公開された。アメリカ中西部のワイオミング州ウインドリバーのインディアン居留地を舞台にした映画であり、監督のテイラー・シェリダンは綿密に同居留地の調査を行い、作品を制作したという。
- 2 “Indian Industrial School, Carlisle, Pa” pp.3-4.
- 3 インディアン学校がネイティブ・アメリカンの文化を収奪したのみならず、非人道的な暴力の温床でもあり、虐待、性的暴行が横行していたことは忘れてはならない事実である。例えば近年でもカナダのモホーク・インディアン学校跡地で調査が始まり、そこにはネイティブ・アメリカンの子どもたちの遺体が埋められているという。これまでカナダ全体のインディアン学校跡地から少なくとも1000人以上のネイティブ・アメリカンの子どもたちの遺体が確認されている (<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/109871?display=1>)。〔2022年9月1日閲覧〕
- 4 例えばジム・ソープはネイティブ・アメリカンのなかでも最も優れたアスリートの一人であったと言えるだろう。カーライル・インディアン学校でフットボールの選手であったソープは1912年のストックホルムで開催された第5回オリンピック競技大会の陸上5種競技、10種競技に出場し、いずれも金メダルを獲得している。
- 5 鎌田遵『ネイティブ・アメリカン—先住民社会の現在』岩波新書、2009年、p.134.
- 6 煎本孝『カナダ・インディアンの世界から』福音館書店、2002年、p.276.
- 7 Alisse Ali-Christie “American Indian Collegiate Athletes Accessing Higher Education Through

- Sport,” Chapter 5, pp.89-108. *The Native American Identity in Sports : Creating and Preserving a Culture*. Edited by Frank A. Salamone, Lanham: Rowman & Littlefield, 2013.
- 8 Castillo, Susan. “Postmodernism, Native American Literature and the Real : The Silko-Erdrich Controversy.” *Notes from the Periphery: Marginality in North American and Culture*. New York : Peter Lang, 1995, pp.170-90. Krupat, Arnold. *The Turn to the Native*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1996. Larson, Charles R. *American Indian Fiction*. Albuquerque : University of New Mexico Press, 1978.
- 9 ポストコロニアルリズム、ナラティブとアイデンティティの関係については、ホミ・K・バーバ（磯前順一、ダニエル・ガリモア訳）『ナラティブの権利 戸惑いの生へ向けて』みすず書房、2009年、レイ・チョウ（本橋哲也訳）『ディアスポラの知識人』青土社、1998年を、ライフストーリーやライフストーリーの再構築については、やまだようこ編著『人生を物語る 生成のライフストーリー』ミネルバ書房、2000年、アイヴァー・グッドソン、パット・サイクス（高井良健一、山田浩之、藤井泰、白松賢訳）『ライフストーリーの教育学』昭和堂、2006年、谷富夫『新版ライフストーリーを学ぶ人のために』世界思想社、2008年を参照。
- 10 トリン・T・ミンハ（竹村和子訳）『女性・ネイティブ・他者 ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店、1995年、pp.242-244.

*執筆分担

- 1章 はじめに 【金】
- 2章 スポーツのなかの先住民表象の問題 【金】
- 3章 アリセ・アリ・クリスティによる家族の語り 【小笠原】
- 4章 家族の語りと社会的アイデンティティ 【小笠原】
- 5章 おわりに 【小笠原】

** 本研究は 2022 年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。

参考文献

- アイヴァー・グッドソン、バット・サイクス（高井良健一、山田浩之、藤井泰、白松賢訳）『ライフヒストリーの教育学 実践から方法論まで』昭和堂、2005年
- 鎌田遵『ネイティブ・アメリカン—先住民社会の現在』岩波新書、2009年
- 煎本孝『カナダ・インディアンの世界から』福音館書店、2002年
- 谷富夫編『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、2008年
- トリン・T・ミンハ（竹村和子訳）『女性・ネイティブ・他者 ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店、1995年
- 野口裕二『物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院、2002年
- ホミ・K・バーバ（磯前順一、ダニエル・ガリモア訳）『ナラティブの権利 戸惑いの生へ向けて』みすず書房、2009年
- レイ・チョウ（本橋哲也訳）『ディアスポラの知識人』青土社、1998年
- やまだようこ『人生を物語る 生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房、2000年
- Alisse Ali-Christie, "American Indian Collegiate Athletes Accessing Higher Education Through Sport," Chapter 5, pp.89-108. *The Native American Identity in Sports: Creating and Preserving a Culture*. Edited by Frank A. Salamone, Lanham: Rowman & Littlefield, 2013.
- Arnold Krupat, *The Turn to the Native*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1996.
- Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origins and Spread of Nationalism*. London: Verso, 1983.
- Charles R. Larson, *American Indian Fiction*. Albuquerque: University of New Mexico Press, 1978.
- Kate Theimer, "A Very Correct Idea of Our School," *A Photographic History of the Carlisle Indian Industrial School*, Kindle Direct Publishing, 2018.
- John Bodnar, *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century*. Princeton: Princeton University Press, 1992.
- Richard Henry Pratt, *Eighteenth Annual Report of the Indian Industrial School at Carlisle, Penna.*, 1897.
- Susan Castillo, "Postmodernism, Native American Literature and the Real: The Silko-Erdrich Controversy." *Notes from the Periphery: Marginality in North American and Culture*. New York: Peter Lang, 1995, pp.170-90.
- "Indian Industrial School, Carlisle, Pa"